



Title	吐魯番出土文物研究会会報 第86号
Author(s)	
Citation	吐魯番出土文物研究会会報. 1993, 86, p. 1-8
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78897
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

吐魯番出土文物研究会会報

第86号

1993年3月1日
吐魯番出土文物研究会

■ 目 次 ■

＜ 目 録 ＞ 吐魯番出土文物關係論著目録（稿） - 1991・国内篇 -	
.....	關尾史郎編 1
＜ 索 引 ＞ 吐魯番出土漢文墓志索引稿（I）	關尾史郎編 3

吐魯番出土文物關係論著目録（稿）

— 1991・国内篇 —

關尾史郎編

【 は じ め に 】

本目録は、1991年一年間に、日本国内で発表された吐魯番出土文物關係の論著を輯めたものである。体裁の基本は本誌第63号（1991年6月15日発行）に掲載した「1990・国内篇」に準じているが、今回から発行年月も併記することにした。

なお本誌も、一昨年は月刊もしくは半月刊で、第52号から第71号までの計二〇冊が発行されたが、これについては、第66号（1991年8月1日発行）と、第79号（1992年8月1日発行）に掲載の総目次を参照願いたい。

I 総 記

- (1) 吐魯番出土文物研究会編『吐魯番出土文物研究情報集録－吐魯番出土文物研究会会報 1～50号－』（平成2年度科学研究費補助金〈総合研究B・中央ユーラシア諸民族の歴史・文化に関する国際共同研究の企画・立案〉成果報告書 No.2） 1991年3月

II 図 録（写真・図版）

- (1) 西林昭一『ヴィジュアル 書芸術全集』第四巻・三国～東晋 雄山閣 1991年6月
(2) 大橋修一『ヴィジュアル 書芸術全集』第五巻・南北朝 雄山閣 1991年10月

III 資 料（文書・墓誌）／IV 調 査 報 告

V 概 説・研 究・紹 介

A 著 書

- (1) 陳舜臣『天竺への道』朝日新聞社・朝日文庫ち-2-6 1991年1月
☆原版：朝日新聞社 1986年6月
(2) 陳舜臣『続・中国発掘物語』講談社・講談社文庫ち-1-41 1991年12月
☆原版：平凡社 1984年10月
(3) 中村裕一『唐代制勅研究』汲古書院 1991年2月

☆所収：「唐代の制書と詔書－唐公式令研究（25）－」（1986年）／「敦煌発見唐公式令残巻の制作年次について」（1990年）／「唐乾封二年詔授告身二種－唐公式令研究（27）－」（1986年）／「制・勅の公布」（1988年）／「唐代制勅の公布に就いて－唐公式令研究（20）－」（1986年）

(4) 中村裕一『唐代官文書研究』中文出版社 1991年12月

☆所収：「トルファン出土唐永淳元年汜德達告身と令書式について－唐公式令研究（一）－」（1974年）／「唐代の露布」（1988年）／「敦煌・吐魯番出土唐代告身四種と制書について－唐公式令研究（三）－」（1976年）／「吐魯番出土の唐代「版授」文書に就いて」（1984年）／「有鄰館所蔵の唐代軍功公驗に就いて」（1988年）／「唐代史料にみえた「牒」と「牒」」（1985年）

(5) 西林昭一『書の文化史』上巻 二玄社 1991年2月

(6) 藤枝 晃『文字の文化史』岩波書店・同時代ライブラリ-83 1991年10月

☆原版：岩波書店 1971年10月

B 論文類

(7) 池田 温「東亜年号管見－踏襲・模倣をめぐって－」『東方学』第82輯 1991年7月 1～18

(8) 池田 温「解説」『西川寧著作集』第四巻・西域出土晋代墨蹟の書道史的研究 二玄社 1991年12月 327～341

(9) 池田 温「トゥルファン古写本展を観る方々のために」『現代書道二十人展第35回記念「トゥルファン古写本展」図録』朝日新聞社東京本社文化企画局企画第一部 1991年 1～6

(10) 上野アキ「コレクションを読む オーレス・スタインと西域美術」長澤和俊・NHK取材班編『NHK大英博物館5 中央アジア・東西文明の十字路』日本放送出版協会 1991年2月 112～120

(11) 上野アキ「絵画作品の諸問題」龍谷大学三五〇周年記念学術企画出版編集委員会編『佛教東漸－祇園精舎から飛鳥まで－』思文閣出版 1991年12月 146～169

(12) 大櫛敦弘「中国古代における鉄製農具の生産と流通」『東洋史研究』第49巻第4号 1991年3月 1～19

(13) 清木場東「唐代の水陸運賃について－脚法を中心として－」『東洋史研究』第50巻第3号 1991年12月 58～74

(14) 小林芳規「筆記具としての角筆の出現－角筆の世界を求めて 2－」『しにか』第2巻第5号 1991年5月 79～85

(15) 關尾史郎「「田畝作人文書」小考－トルファン出土高昌国身分制関係文書研究序説－」『新潟史学』第26, 27号 1991年5, 10月 61～74, 65～83

(16) 關尾史郎「高昌国の侍郎について－その所属と職掌の検討－」『史林』第74巻第5号 1991年9月 135～150

(17) 關尾史郎「「章和五（535）年取牛羊供祀帳」の正体－『吐魯番出土文書』割記（七）－」（V）『史信』（新潟大学關尾ゼミ）第24号 1991年12月 1～4

(18) 陳国燦／關尾史郎訳「長安、洛陽よりトルファンに将来された唐代文書について」『東洋学報』第72巻第3・4号 1991年3月 65～93

(19) 東野治之「開元通宝の錢文－高昌・日本の錢貨との関連から－」『考古学研究紀要』（辰馬考古資料館）第2号 1991年1月 119～128

☆再録：東野治之『遣唐使と正倉院』岩波書店 1992年7月 第三部

(20) 中村裕一「唐代制勅研究の意義と課題」V（3） 3～34

(21) 中村裕一「唐代官文書研究の意義と課題」V（4） 3～38

- (22) 中村裕一「唐代文献にみえる文書伝達例とその速度」Ⅴ(4) 458～491
- (23) 中村裕一「敦煌発見の唐「公式令」残巻の誤字と脱字について」『汲古』第19号 1991年6月 17～21, 16
- (24) 西谷 正「シルクロードの考古学—新疆から朝鮮・日本まで—」権藤与志夫編『ウイグル—そのひとびとと文化—』朝日新聞社・朝日選書424 1991年4月 35～80
- (25) 北條祐英「西突厥の東方経略とその影響について」『東海史学』第25号 1991年3月 73～92
- (26) 町田隆吉「(シルクロード)オアシス都市トルファン」『ウータン』第106号 1991年5月 78～85
- (27) 三保忠夫「『吐魯番出土文書』における量詞について」『島大國文』第20号 1991年12月 1～16
- (28) 森安孝夫「ウイグル＝マニ教史の研究」『大阪大学文学部紀要』第31・32巻 1991年8月 1～248

Ⅵ 動 向・目 録

A 著 書

- (1) (財)東洋文庫唐代史(敦煌文献)研究委員会編『吐魯番・敦煌出土漢文文書研究文献目録』東洋文庫 1991年3月

B 論文類

- (2) 荒川正晴「【研究会活動紹介】吐魯番出土文物研究会活動報告—附.『吐魯番出土文物研究会会報』(第1号～第50号)総目次—」『唐代史研究会会報』第4号 1991年7月 29～33
- (3) 池田 温「第1部会 敦煌・吐魯番研究」『東方学会報』第61号 1991年12月 6～7
- (4) 内藤みどり「1990年の歴史学界—回顧と展望—/内陸アジア・1」『史学雑誌』第100編第5号 1991年5月 265～270
- (5) 長澤和俊「中央アジア文明への招待 東西文明の十字路—オクサス遺宝とスタイン・コレクション—」長澤・NHK取材班編『NHK大英博物館5 中央アジア・東西文明の十字路』(前出) 8～36

Ⅶ そ の 他

- (1) 川瀬一馬『随筆 蝸牛』中央公論社・中公文庫か-39-2 1991年5月
☆所収:「絲綢之路、西域行遊記」(1983年)
- (2) 陳舜臣『長安の夢』講談社・講談社文庫ち-1-37 1991年8月
☆原版:平凡社 1985年11月
- (3) 陳舜臣『シルクロード旅ノート』徳間書店・徳間文庫ち-1-35 1991年10月
☆原版:徳間書店 1988年3月

(以上)

吐魯番出土漢文墓志索引稿(Ⅰ)

關 尾 史 郎 編

【は じ め に】

今世紀初頭以来、阿斯塔那・哈拉和卓古墓群や雅爾湖古墓群をはじめとする吐魯番盆地の古墓群から出土した漢文墓志の総点数は、約三百点に上る。これらの墓志が作成された時代は、五世紀中期の

北凉政権の時代から、麹氏高昌国をはさんで、八世紀中期の唐西州時代に及ぶが、なかでも麹氏高昌国時代の墓誌は、嶋崎昌氏の一連の研究⁽¹⁾が示しているように、編纂史料の記述の欠を補うべき貴重な史料として早くから注目されてきた。そしてその後も新疆維吾爾自治区博物館の調査が進捗するにつれ、麹氏高昌国時代の墓誌は、白須淨眞氏の社会史的な研究⁽²⁾、侯燦氏の官制研究⁽³⁾、および王素氏の暦法研究⁽⁴⁾などに史料的な根拠を提供しつづけてきた。

近年、上記の古墓群、とりわけ阿斯塔那・哈拉和卓古墓群から出土したいわゆる吐魯番文書の研究が活発化しているが、個々の文書に対する分析が深化するのにもとない、その出土状況に対しても注意が払われるようになった。換言すればこれは、文書が当該の墓に埋納された事情を明らかにすることであり、それによって文書の性格や機能を確定することを意味しているが、そのためには、文書が出土した墓の墓主（被葬者）を特定する必要があることはいうまでもない⁽⁵⁾。そしてかかる作業に対して墓誌がいかなる文物にも増して有用なデータを提供することも、これまたいうまでもなからう。

このような研究状況とも関わって、墓誌に対する関心が高まってきつつあるが、それとともに墓誌自体の史料的な性格や価値にも関心が向けられつつある。この方面における代表的な成果として白須淨眞氏の研究⁽⁶⁾を上げることができるが、白須氏はさらにこれらの成果をふまえ、墓誌をそれが出土した墓葬・墓域とあわせて分析することにより、四・五世紀から八世紀に至る吐魯番地域社会の歴史的な展開過程を展望されている⁽⁷⁾。いっぽうまた中国においても、墓誌が出土した墓葬・墓域が華北地域のそれに対する分析との関連で論及されるようになりつつある⁽⁸⁾。

しかしながら吐魯番から出土した墓誌の拓本や釈文を網羅的に整理・紹介したものは、残念ながら現在までない。今世紀初頭の各国の探検隊が将来した墓誌は、それぞれの報告中に個別に記録されているので、幾多の報告書を併照する必要がある⁽⁹⁾。また近年の新疆維吾爾自治区博物館の調査によって出土したものについては、侯燦氏が一五七点の釈文を一括して紹介しているが⁽¹⁰⁾、なぜか吐魯番地区文管所に所蔵されている墓誌は対象外になっており、「解放後、新たに出土した」墓誌の全てが収録されているわけではない。

そこで本稿では、解放の前後を問わず、現在までに吐魯番盆地の古墓群から出土した（将来された）漢文墓誌の全てに関わる基本的なデータを一括して収録することとした。紙幅の都合上、一点一点の墓誌に関するデータは最小限にとどめざるをえなかったが、この点については、初出の報告書や図録に各自あたっていただきたい。

【註】

- (1) 嶋崎昌『隋唐時代の東トゥルキスタン研究－高昌國史研究を中心として－』（東京大学出版会、一九七七年）所収の諸論文、とくに「麹氏高昌國官制考」（『中央大学文学部紀要』第二八、三二号、一九六三年）を参照のこと。
- (2) 白須淨眞「高昌門閥社会の研究－張氏を通じてみたその構造の一端－」（『史学雑誌』第八八編第一号、一九七九年）。
- (3) 侯燦「麹氏高昌王国官制研究」（『文史』第二二輯、一九八四年〈同氏『高昌楼蘭研究論集』烏魯木齊 新疆人民出版社、一九九〇年、所収〉）。
- (4) 王素「麹氏高昌暦法初探」（国家文物局古文献研究室編『出土文献研究続集』北京 文物出版社、一九八九年）。
- (5) 不十分ながら、私も「トゥルファン出土高昌国税制関係文書の基礎的研究－條記文書の古文書学的分析を中心として－」（未完）（『人文科学研究』〈新潟大学人文学部〉第七四、七五、七八、八一、八三輯、一九八八、八九、九〇、九二、九三年）や、「「田畝作人文書」小考－トゥルファン出土高昌国身分制関係文書研究序説－」（『新潟史学』第二六、二七号、一九九一年）などにおいて、この点に配慮したつもりである。

- (6) 白須淨眞「高昌墓塼考釈」(未完)(『書論』第一三,一四,一九号、一九七八,七九,八一年く[三]以外は萩信雄氏と共著)。
- (7) 白須淨眞「アスターナ・カラホージャ古墳群の墳墓と墓表・墓誌とその編年―三世紀から八世紀に亙る被葬者層の変遷をかねて―」(未完)(『東洋史苑』第三四・三五号、一九九〇年)、「トゥルファン古墳群の編年とトゥルファン支配者層の編年―麹氏高昌国の支配者層と西州の在地支配者層―」(『東方学』第八四輯、一九九二年)。なお阿斯塔那・哈拉和卓古墓群の墓葬を墓誌の有無も含めて整理した荒川正晴氏の「阿斯塔那・哈拉和卓古墳群墳墓一覧表」(『中央アジア史の再検討―新出史料の基礎的研究―』〈昭和六三年度科学研究費補助金[総合研究A]研究成果報告書〉一九九〇年)、ならびに「阿斯塔那・哈拉和卓古墳群墳墓一覧補訂」(『会報』第五三号、一九九一年)も参照されるべき貴重な成果である。
- (8) 許自然編『中国黄土地区歴代墓葬及考古基建鉅探』(北京 地質出版社、一九八八年)のほか、徐萃芳「中国秦漢魏晉南北朝時代の陵園和塋域」(『考古』一九八一年第六期)、張小舟「北方地区魏晉十六国墓葬的分区与分期」(『考古学報』一九八七年第一期)、および陳安利「西安、吐魯番唐墓葬制葬俗比較」(『文博』一九九一年第一期)などがある。
- (9) 各探検隊が将来・出土した墓誌とそれを記載した報告書や図録などについては、白須・萩、前掲「高昌墓塼考釈」(一)を参照されたい。
- (10) 侯燦「解放後新出吐魯番墓誌録」(北京大学中国中古史研究中心編『敦煌吐魯番文献研究論集』第五集 北京 北京大学出版社、一九九〇年)。

【引用文献略号・解題】

* 索引表の図版・釈文欄に引く文献とその略号は以下のとおりである。このうちの多くは、白須・萩、前掲「高昌墓塼考釈」(一)に言及・紹介されているので、ここでは近年刊行された文献に限定して簡単な解題を付しておくことにした。なお【】内の注記は、図版・釈文欄に掲げる数字を示している。

王 樹：王樹枏『新疆訪古録』一九一八年(『石刻史料新編』第二輯第一五卷、所収)、卷二。

【数字は葉】

王 鏞：王鏞・李森編『中國古代磚文』北京 知識出版社 一九九〇年。【数字は頁】

大谷探検隊将来と黄文弼収集の三点の高昌国時代の墓表について、写真と釈文(句読点なし)を掲載するが、選択の基準は不明である。釈文も『中国歴代書法名作賞析』や黄bといった先行研究に依拠しているようである。

香 川：香川黙識編『西域考古圖譜』東京 國華社 一九一五年(復刻：東京 柏林社書店 一九七二年)、下巻の「史料」の項。【数字は図版番号】

京 博：京都文化博物館・京都新聞社編『旅順博物館所蔵品展―幻の西域コレクション―』京都 京都文化博物館・京都新聞社 一九九二年。【数字は頁】

大谷探検隊が将来し、現在中国の旅順博物館に収蔵されている五方中二方が、旅順博物館展(この展覧自体については、本誌第八四号の片山章雄「旅順博物館所蔵品展覧え書」を参照されたい)に出陳されたが、図録にも釈文とともに写真が掲載されている。

侯：侯燦「解放後新出吐魯番墓誌録」(北京大学中国中古史研究中心編『敦煌吐魯番文献研究論集』第五輯 北京 北京大学出版社 一九九〇年)。【数字は録注】

表題に示す墓志を集大成した画期的な成果だが、先述したように吐魯番文管所所蔵分をはじめとするいくつかについては脱落がある(詳細については、本誌第七八号の新著紹介を参照されたい)。

黄 a：黄文弼編『高昌第二分本 高昌專集』西北科學考查團叢刊之一 一九三一年。【「集」は專

集の、「文」は専文の略／数字は葉】

黄 b : 黄文弼『高昌磚集』増訂本 北京 中國科學院・考古學特刊第二號 一九五一年。【数字は頁】

黄 c : 黄文弼『吐魯番考古記』北京 中國科學院・考古學特刊第三號 一九五四年（再版：北京科學出版社・考古學專刊丁種第五號 一九五八年）。【数字は図版番号】

国 文 : 国家文物局古文献研究室・新疆維吾爾自治区博物館・武漢大學歷史系編『吐魯番出土文書』全十冊 北京 文物出版社 一九八一～一九九一年。【ローマ数字は巻数／数字は頁】

本書の文書が出土した各墓の冒頭の解説で言及されている墓志のうちの六方については、侯は実見していないという理由で収録していない。これらはいずれも阿斯塔那三一〇、二〇番台の墓から出土したものであるため、この部分については管理や記録が不充分だった可能性が高い。

新 考 : 新疆首届考古專業人員訓練班（李文永執筆）「交河故城、寺院及雅爾湖古墓発掘簡報」（『新疆文物』一九八九年第四期）。【数字は頁】

一九五六年に行なわれた発掘調査の記録で、雅爾湖の古墓群から八方の墓志が出土した。この報告の詳細については、本誌第六〇号の新著紹介を参照されたい。

新博 a : 新疆維吾爾自治区博物館「新疆吐魯番阿斯塔那北区墓葬発掘簡報」（『文物』一九六〇年第六期）。【数字は頁】

新博 b : 新疆維吾爾自治区博物館「吐魯番県阿斯塔那－哈拉和卓古墓群清理簡報」（『文物』一九七二年第一期）。【数字は頁】

新博 c : 新疆維吾爾自治区博物館・西北大學歷史系考古專業「一九七三年吐魯番阿斯塔那古墳群発掘簡報」（『文物』一九七五年第七期）。【数字は頁】

新博 d : 新疆維吾爾自治区博物館編『新疆出土文物』北京 文物出版社 一九七五年。【数字は頁】

新博 e : 新疆ウイグル自治区博物館編『新疆ウイグル自治区博物館』東京 講談社・中国の博物館第二期第一巻 一九八七年。【数字は図版番号】

巻末に張蔭才氏による解説「碑刻墓誌」が付されており、各方ごとにその内容が簡単に紹介・要約されている。

新 文 : 新疆維吾爾自治区文物普查辦公室・吐魯番地区文物普查隊「吐魯番地区文物普查資料」（『新疆文物』一九八八年第三期）。【数字は頁】

一九八八年に行なわれた自治区の「文物普查工作」のうち、吐魯番地区の報告。この調査により十二か所に及ぶ晋唐から宋元時代の古墓群に調査の手が加えられたが、発見された墓志は、鄯善県魯克沁鎮の布爾土居結木古墓群の一方だけで、それも年次未詳のものだった。

孫 : 孫蘭風・胡海帆主編『隋唐五代墓誌匯編 北京大学卷』天津 天津古籍出版社 一九九二年。【ローマ数字は巻数／数字は頁】

唐代墓志一方の写真を掲載する。

端 : 端方『陶齋藏石記』 一九〇九年（『石刻史料新編』第一輯第一一巻、所収）巻一七。【数字は葉】

中 博 : 國立中央博物館編『國立中央博物館所藏 中央アジア美術』ソウル 三和出版社 一九八六年（朝鮮語）。【数字は頁】

韓国の中央博物館所蔵品のうち、中央アジア美術部門の図録で、大谷探検隊が将来し、現在同館が所蔵している六方のうち、一方の写真が掲載されている。

張 維 : 張維『隴右金石録』蘭州 甘肅省文献徵集委員会 一九四三年（『石刻史料新編』第一輯第二一巻、所収）、巻一。【数字は葉】

張 蔭：張蔭才「吐魯番阿斯塔那左憧憙墓出土幾件唐代文書」（『文物』一九七三年第一〇期）。
【数字は頁】

趙：趙超『漢魏南北朝墓誌彙編』天津 天津古籍出版社 一九九二年。【数字は頁】
黃 a・黃 bに収録されている墓志のうち、南北朝時代に作成された明証のある三四方全ての
積文を掲載する。黃 a・黃 bの異体字や別字を正字に改め、句読点を付している。一部
だが、黃 a・黃 bの積読を改めている箇所もある。

陳：陳国燦・侯燦・李微「韓楽然与新疆文物芸術考古」（『文物天地』一九八九年第六期）。
【数字は頁】

一九四七年に事故死した画家韓楽然がその前年に阿斯塔那古墓群で発見した墓志を紹介す
る。彼が発見した墓志は全部で八方に上ると言われているが、現在では散逸してしまい、
当時の記録などから復原できるのは二方だけである。

吐 博：《吐魯番博物館》編委会編『吐魯番博物館』烏魯木齊 新疆美術攝影出版社 一九九二年。
【数字は頁】

新設された吐魯番博物館の所蔵品の図録で、四方の墓志の写真を掲載する。

吐文 a：新疆吐魯番地区文管所（柳洪亮執筆）「唐北庭都護高耀墓発掘簡報」（『新疆社会科学』一
九八五年第四期）。【数字は頁】

吐文 b：新疆吐魯番地区文管所（柳洪亮執筆）「高昌墓磚拾遺」（北京大学中国中古史研究中心編
『敦煌吐魯番文献研究論集』第三輯 北京 北京大学出版社 一九八六年）。

吐魯番地区文管所所蔵の墓志一六方について、積文・模本を各種のデータとともに掲載・
紹介する。ただし出土地・整理番号などのデータに不確かなものがあるほか、模本につい
ても問題がある。

吐文 c：新疆吐魯番地区文管所（柳洪亮執筆）「吐魯番采坎古墓群清理簡報」（『新疆文物』一九九
〇年第三期）。【数字は頁】

一九七五年に行なわれた吐魯番県五星公社の采坎古墓群に対する発掘調査の報告。一方の
墓志が出土したが、この墓志自体は吐文 bにも収録されている。ただし積文はこの吐文 c
と吐文 bで異なっている（詳細については、本誌第七八号の新著紹介を参照されたい）。

東 博：『東京国立博物館図版目録 大谷探検隊将来品篇』東京 東京国立博物館 一九七一年。
【図版の数字は図版番号／積文の数字は頁】

内 藤：内藤湖南「高昌国の紀年に就て」（『芸文』第六年第一一号 一九一五年〈『内藤湖南全
集』第七巻・研幾小録／讀史叢録 東京 筑摩書房 一九七〇年、所収〉）。【数字は全集
の頁】

文 研：中国文物研究所編『唐代墓誌彙編』上海 上海古籍出版社・中国文物研究所叢書之一 一九
九二年。【数字は頁】

黃 a・黃 b・黃 cに収録されている墓志のうち、唐代（六一八年～）に作成された明証の
ある四九方と、羅 bに収録されている大谷探検隊将来の三方の計五二方のほか、端の一方
と侯のうち二方の計三方については、北京図書館や周紹良氏所蔵の拓本によって積文を提
示する。いずれも句読点を打ち、改行箇所を明示する。ただし「北涼年次未詳張季宗墓
表」を唐代墓志（殘誌〇六一）とするのは明らかな誤りである。

北 資：『敦煌吐魯番資料展覽目録』北京 敦煌吐魯番学北京資料中心 一九八八年。【図版の数字
は図版番号／積文の数字は頁】

一九八八年到北京で開かれた表題の展覽の目録。大谷探検隊将来で現在旅順博物館に所蔵
されている三方の墓志が出陳された。

北 図：北京図書館金石組編『北京図書館蔵中国歴代拓本匯編』鄭州 中州古籍出版社 一九八九

年。【ローマ数字は巻数／数字は頁】

穆：穆舜英・王炳華主編『隋唐五代墓誌匯編 新疆卷』天津 天津古籍出版社 一九九一年。

【数字は頁】

麹氏高昌国から唐西州時代にかけて作成された一九九方に及ぶ墓志の写真を掲載する。選択の基準は明らかではないが、収録範囲は黄 a・黄 b・羅 b・Stein・Giles・侯・吐文 bなどに及ぶ。黄 a・黄 b 収録分は写真が不鮮明で、史料的な価値は高いとはいいがたいが、侯で釈文だけが紹介された墓志で初めて写真が公表されたものも少なくなく、若干だが、本書によって存在自体が初めて確認されたものもある。

八木：八木奘三郎「吐魯番発見の木乃伊と朝鮮風俗との一致」（『民族と歴史』第六巻第一号 一九二一年）。【数字は頁】

著者が旅順博物館で実見したものを含む計七方の大谷探検隊将来の墓志の録文を掲載する（この文献については片山章雄氏の教示を得た）。

吉川：吉川小一郎「支那紀行」（上原芳太郎編『新西域記』下巻 東京 有光社 一九三七年〈復刻：東京 井草出版 一九八四年〉、所収）、巻二。

羅 a：羅振玉『西陲石刻録』 一九一四年（『石刻史料新編』第二輯第一五巻、所収）。【数字は葉】

羅 b：羅振玉『西陲石刻後録』 一九一四年（『石刻史料新編』第二輯第一五巻、所収）。【数字は葉】

羅 c：羅振玉「高昌專録」（『遼居雜著乙編』遼東 一九三三年〈『羅雪堂先生全集』初編第六冊、所収〉）。【数字は全集の頁】

柳：柳洪亮「唐天山県南平郷令狐氏墓志考釈」（『文物』一九八四年第五期）。【数字は頁】

一九七六年に吐魯番県の五星公社で発見された一方の唐代墓志を写真とともに公表する。

旅博：『旅順博物館陳列品圖録』旅順 旅順博物館 一九三七年。【数字は図版の番号】

戦前の旅順博物館の所蔵品の図録で、大谷探検隊将来の墓志のうち四方の写真を掲載している。

Stein：A.Stein;Innermost Asia,5vols.(Oxford,1928),Vol. IV. 【数字は図版の番号】

Giles：L.Giles;“Chinese Inscriptions and Records,” in A.Stein ed.,op.cit.,Vol. II. 【数字は頁】

Maspero：H.Maspero;“Chinese Sepulchral Inscriptions from Astana,Turfan,” in A.Stein ed.,op.cit.,Vol. II. 【数字は頁】

* この他、新疆維吾爾自治区博物館（李徵執筆）「吐魯番県阿斯塔那－哈拉和卓古墓群発掘簡報（1963－1965）」（『文物』一九七三年第一〇期）によれば、延昌廿九（五八九）年、延和四（六〇五）年、および重光元（六二〇）年という三基の紀年墓が発掘されたという（同、一〇頁）。この期間中に発掘されたのは、阿斯塔那一号墓から同四二号墓、哈拉和卓一号墓から一四号墓の計五六基であり、延昌廿九年墓は唐紹伯の墓表が出土した阿斯塔那一八号墓のことと思われるが、残りの延和四年墓と重光元年墓は該当する墓表がない。したがって次号の索引表に掲載した以外の墓表である可能性もあるが、この「発掘簡報」以外に記載がないので、表には掲載しなかった。

事務局（連絡先） 〒182 東京都調布市国領町5-19-14

荒川正晴方

TEL 0424(81)4633

吐魯番出土文物研究会 (The Research Society for Turfan Relics)